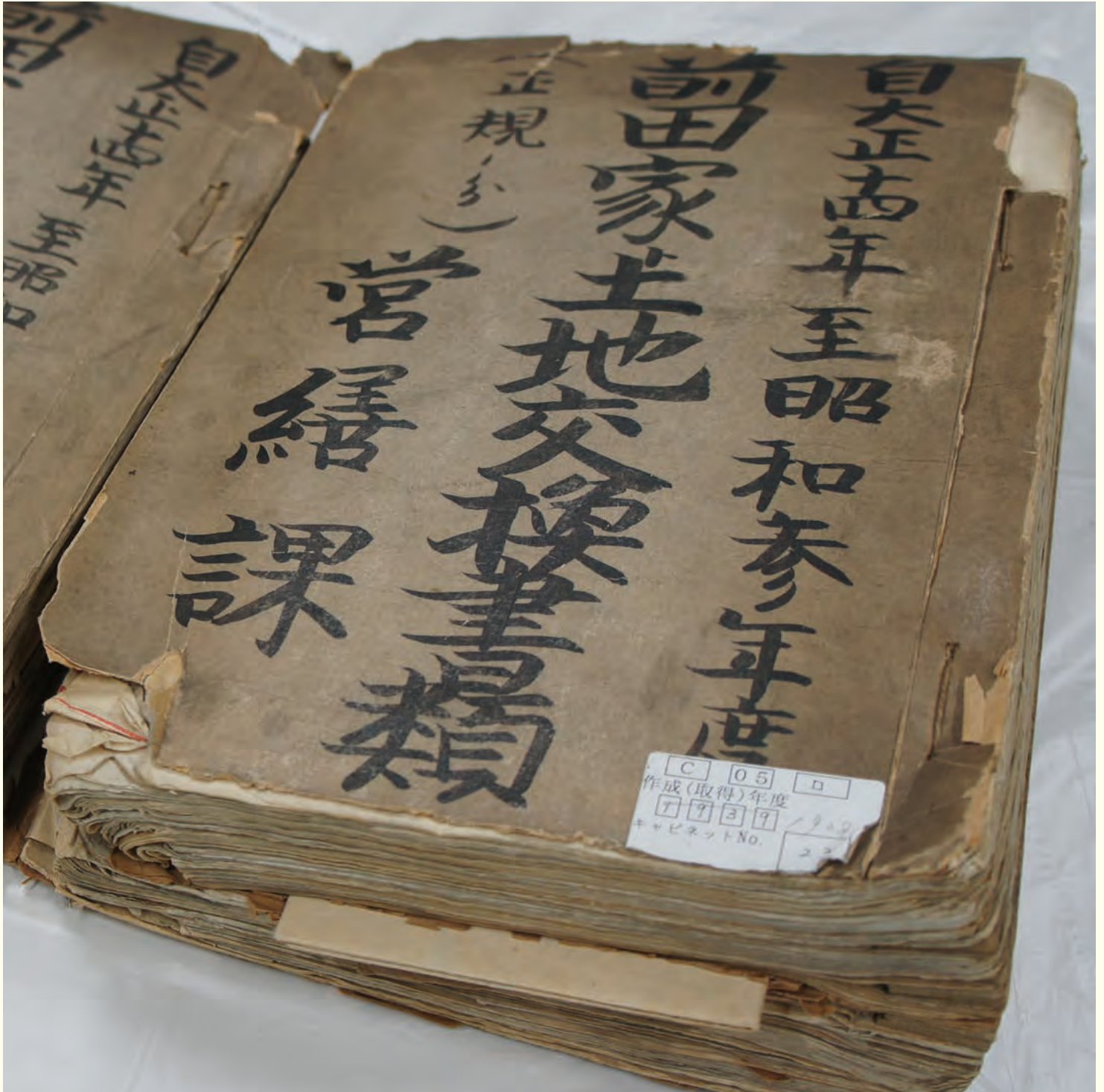


学内六報

2016.3.25

no.1480



国立公文書館等に指定された文書館への法人文書移管がスタート
あなたの書類が東大の歴史になる!!

梶田隆章先生、授賞式以後の2ヶ月間
ノーベル賞の余韻

何と何を交換
したんだっけ?
p3を見てね



国立公文書館等に指定された^{ぶんしょかん}文書館への法人文書移管がスタート あなたの書類が 東大の歴史になる!!

—あのう……、そもそも国立公文書館等の「等」って何ですか？

森本 公文書管理法、正式には「公文書等の管理に関する法律」というものがあります。これにより、独立行政法人を含む国の機関は、保存年限が満了となった文書のうち、歴史的に重要なものを国立公文書館で保存することとなりました。国立公文書館は竹橋にあります。これとは別に、国立大学や省庁が同等の機能と設備を持つ機関をつくれればそこで文書を保管することができます。国立公文書館ではないがそれと同等の機能と設備を持つのが国立公文書館等です。

加藤 現在、東京、東北、名古屋、京都、大阪、神戸、広島、九州、東京工業の9大学と、日本銀行金融研究所アーカイブ、外務省の外交史料館、宮内省の宮内公文書館の3館、計12館があります。

「公文書」とはどのようなもの？

—では、公文書とは何ですか？

森本 国などの組織が業務としてつくった文書のうち、組織で共有しているものです。たとえば、自分用にコピーした書類は違いますが、課で共有するファイルは公文書。公文書のうち、官庁などでつくったものは行政文書、国立大学法人などでつくったものは法人文書といいます。

—たとえば、広報課員の私が広報室

会議に出した資料は法人文書ですか？

森本 はい。業務の一環で作成した文書で、皆がいつでも見られる共有の状態にありますよね。ですから、法人文書です。

—今回の取材用に加藤先生にメールを打ちましたが、それも法人文書？

加藤 紙である必要はありません。メール会議のように課の記録として残るものは法人文書に該当します。課が出す通知や原義書などはもちろん法人文書です。文書館は一義的には文字資料を集めますが、モノや図面なども対象です。大学の運営に関わる重要なものであれば、歴史的価値のある法人文書として保存します。

宮本 写真のネガやマイクロフィルムやDVD、最初からデジタル・データとして作成された資料についても保管します。名前は文書館ですが、紙に限らず大学が公式につくった情報を保管する機関です。

加藤 保存年限が過ぎた文書で、原課で必要なくなったものは、これまでは破棄するしかありませんでした。ですが今後は、保存年限が過ぎて原課で不要となった書類でも、東京大学の運営の記録として残せるんです。残すだけでなくもちろん活用もできます。

—法人文書というのは何年間保存しないといけないんですか？

森本 ものによります。1年、3年、5年、10年などと重要度によってわかれていま

於：文書館柏分館資料措置室



森本 祥子
准教授

加藤 諭
特任助教

愛知県出身。専門はアーカイブズ学。お薦めは「金しゃちビール」。

宮城県出身。専門は大学史。お薦めは「蔵王」（剛酒師有資格者）。

す。最長は30年ですね。

—たとえば私が広報室会議に出した資料はどのくらい？

加藤 あくまで目安ですが10年ほどではないでしょうか。「東京大学法人文書管理規則」が参考とする年限を明文化していますが、最終的に決めるのは原課です。

—文書館に文書移管すると永遠に保存してくれるんですか？

加藤 はい。

—本当に永遠ですか？

森本 法律で決まっていることですから。

加藤 逆にいうと、我々が勝手に破棄することは許されません。

—では、文書館に文書移管するメリットというのは？

文書館の収蔵資料例

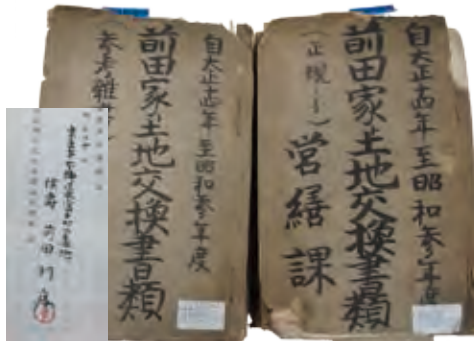
恩賜の銀時計

↓ 服部時計店製の懐中時計は、本学の卒業生・阿久津国造さんのご遺族による寄贈資料です。大正7年までは卒業式に天皇陛下が臨席され、各学部の主席の学生に銀時計を贈っていました。



↑ 本郷の前田家の土地（懐徳園の辺り）と駒場の農学部農場の土地を交換した際の文書はキャンパスに関わる重要記録。当時の評価額や地図、前田利侯侯の署名も見えます。営繕課は今なら施設部が資産管理部でしょう。

前田家との土地交換の書類



開成学校開業式の錦絵



↑ 東大のルーツの一つである開成学校開業式の様子がわかる錦絵。当時はこういう絵が販売されていました。寄贈品か購入品か、由来は不明。中性紙と板で挟んで保管しています。文書館はこうした資料のデジタル化も進めています。

内閣総理大臣の指定を受け、東京大学^{ぶんしょかん}文書館は平成27年4月から国立公文書館等として活動しています。ふーん、と他人事のように受け流すなかれ。実はこれ、文書館と日頃関係のない教職員にとっても重要なことだったので。何がどう重要なのか、我々は何を求められているのか、そこら辺のところを、文書館の3人の先生にお集まりいただき、率直に質問して聞いてみました。簡単に言うと、現場の面倒が減ってスペースが増え、自分がつくった書類が東大140年の歴史に加わるということです。



宮本隆史
特任助教

京都府出身。専門は制度史。お薦めは「龍宮」(黒糖焼酎)。

加藤 大きな視点で言いますと、東大は140年にわたる歴史をもつ、日本を代表する大学の一つです。東大が国内外に果たしてきた役割は大きいでしょう。しかし、運営に関する記録を制度的に集めるセクションはありませんでした。それが今回初めてできた。世界水準の教育研究を目指してきた大学の運営に関する

記録を利活用することで東大のプライオリティを高めることができます。従来死蔵されてきた運営の記録をより利活用できることが一つの大きなポイントです。

現実的な話をしますと、各部局や本部各課のオフィスが狭隘化して紙資料を保存する倉庫がいっぱいです。劣悪な環境で文書が死蔵されている状況がある。倉庫にあるだけで使おうとしてもたどりつけなかったり、重要な記録なのに引っ越しの際に評価を受けないまま捨てられたり。それらが移管されれば書庫スペースを有効活用できます。文書館は適切な温度・湿度で保管し系統立てて整理するので、利活用もしやすくなります。

宮本 移管した文書は、移管元が自由に

借り出すこともできますので、使いにくくなるわけでは全然ありません。

何でも移管するわけではない

——実際、そんなに利用できるものがあるのでしょうか。紙屑も多いのでは？

森本 移管された文書全てを保管するのではなく、絞り込みを行います。国際的には5~10%に絞り込むのが一般的です。重要なもの、メインの会議の記録など、後から振り返ってどういう業務をしたのかわかる書類を残すことになります。

加藤 文書館で「法人文書移管ガイド」を作成し、移管対象となる文書の選定基準を8つ記しています(右欄参照)。たとえば①の「大学および学内諸組織や諸制度の設置・制定および改変に関する基本文書」では、部局・学科等の設置や改廃に関する文書が対象になります。どういう形で案ができてどういう議論を経たのか、という経緯を残すのが基本。これには、実現しなかった構想なども含まれます。

——文書館の中央食堂移転計画があったそうですが、その記録も入るんですね。

加藤 はい。役員会、教授会などの会議録、ホームカミングデイやオープンキャンパスなどの行事に関する記録、記念行事やシンポジウム関係の文書、会計に関する基本文書……。あとは、シラバスのように学生に関わる記録、時間割、試験問題

国立大学の文書管理のしくみ



全過程が「公文書等の管理に関する法律」(H21年法律第66号)の対象

移管対象の文書(法人文書移管ガイドより)

- ①大学および学内諸組織や諸制度の設置・制定および改変に関する基本文書
- ②全学および各部局の運営および評価に関する基本文書
- ③本学の主催する重要行事に関するもの
- ④会計・財務に関する基本文書
- ⑤本学の教育および学生支援活動に関する基本文書
- ⑥大学に関する重要な事件・問題に関する文書
- ⑦大学組織の構成員の在職・在籍を証明する基本記録
- ⑧大学の重要建築物に関する設計図面等

移管対象にならない文書

- ①日常的・定例的な業務の執行に関する記録
- ②教職員・学生および学外利用者等による定例的な申請書類
- ③本部ないし各部局に正本が保存されている文書の副本

もそうです。逆に保管しないのは、物品購入関係の伝票類とか、職員手当など。ただ、これらは基本の選定基準にすぎません。現場にとって重要な記録であれば、移管対象になります。我々はアーキビストとしての評価はできても作成者としての評価はできないので、協議が重要です。

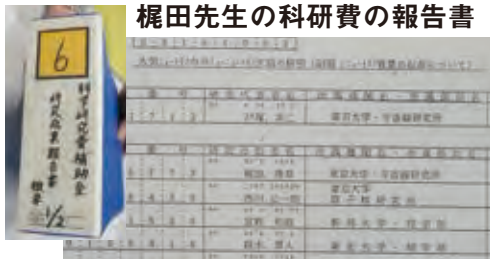
——何%くらいに絞るつもりですか？

加藤 数値目標はたてていません。あくまで文書の重要度をベースに考えたいと思います。やっていくなかで少しずつ数字も見えてくるでしょうけどね。

——今移管を呼びかけているんですね。

加藤 すでに部局の事務長さんや本部各

梶田先生の科研費の報告書



↑研究推進課から移管された平成6年度の科研の報告書です。たまたま梶田隆章先生の報告書が一番上にファイルされていました(代表者は戸塚洋二先生)。科研の資料はプロジェクト終了後10年ほどで保存年限満了ですが、このときは原課に大学史料室(文書館の前身)を知っている人がいて、満了の際に声をかけてくれたそうです。

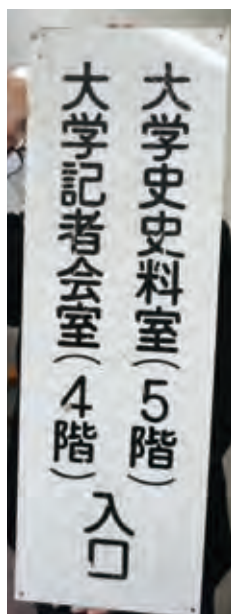
ヘルメット

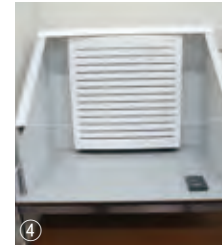
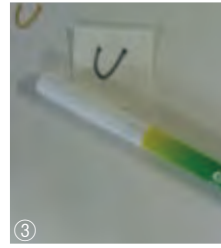
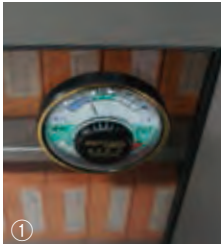


↑これらのヘルメットは教育・学生支援部から移管されたものです。学生の中に運動に関わった人がいて、何らかの理由で当時の学生部に渡ったようです。こうした立体物も中性紙でぐるんで保管しています。

テレホンサービス用原稿と大学史史料室時代の看板

↓東大紛争の時代、××学部で乱闘があったとか、○○先生が学生に囲まれたとか、その日の学内状況を電話で聞けるサービスがありました。その原稿を録音するための原稿を日ごとにファイルした資料です。熱かった時代を感じさせます。→こちらはかつて安田講堂に掲げてあった大学史史料室の看板。セロテープで補修してあります。





①密閉して庫内の最適な保管環境を保つように作られているマイクロフィルムキャビネット。外についている温度・湿度計で中の環境が確認可能。
②書類のたわみを自動補正するドイツZEUTSCHEL製スキャナでデジタル化を進めます。③紙のpHを判別するためのペン。酸性の紙が触れると資料が痛むので使えるのは中性紙だけ。④空気清浄機で汚れを吸い込むドライクリーニングボックス。販売元の株式会社資料保存器材は斯界の大手。

課の文書管理担当者への連絡は始めています。まずは移管候補の文書を用意してください。必要かどうかはすぐわかるものと、そうでないものがあります。そういう場合は、文書館のスタッフが現場を訪問し、現物を確認させていただきます。
森本 東京大学の文書は法人文書ファイル管理簿に記録されています。原則として、作成日、保存満了日時、満了後廃棄するかどうか、などの情報はすでに書かれているはず。このリストをもとに、この書類は廃棄となっているがじつは重要ではないか、逆に、これは全部移管になっているが不要じゃないか、などを斟酌します。法人文書ファイル管理簿は情報公開用のリストの元になっていて、大学のホームページで誰でも見られます。

情報公開の対応の手間も省ける

宮本 文書を文書館に移管すれば、本部各課、各部局では情報公開の対応をしなくてよくなります。これもメリットです。
森本 現在は情報公開請求が情報公開室に入り、そこから本部各課や部局に照会が行って現場が対応しますが、今後は移管されたものすべて文書館が対応します。
加藤 情報公開の対象は業務で使われている現用文書です。文書館に移管されたものはこの対象からはずれ、特定歴史公文書等に移ります。
森本 たとえば、大学の評議会の記録は明治期からすべて現用文書に入っています。情報公開の対象になっていて、請求

されたら出さないといけません。文書の保存年限（最高30年）終了後も、原課で保存していると情報公開の対応もしないといけません。それを、文書館が行います。

——情報公開の場合は手数料がかかりますね。文書館の場合は？

森本 閲覧や撮影だけならかかりません。複写を依頼する場合は料金がかかります。

宮本 資料は基本的に自分のカメラで撮影OK。ただ、個人情報や開示できない情報は見えない形にする場合があります。

——移管から保存までの流れは？

加藤 資料の状態によっていくつかの保存処置をします。基本的には、ドライクリーニングボックスで汚れやカビをとる。クリップ類も、資料の劣化につながるものは外します。そのままファイルすると状態が悪くなりそうな場合は、中性紙封筒に入れたり、中性紙でくるんだり、中性紙の箱に入れたりします。

——整理番号はどうつけるんですか？

森本 図書資料は一冊単位で捉えますが、文書資料は必ず集合体で捉えます。そして固まりごとにIDを振ります。IDがSで始まるのは法人文書。Fで始まるのは個人などから寄贈された文書です。

宮本 法人文書は組織でなく業務で使っているのが特徴です。組織というのは改編されることがありますから。

加藤 業務の担当部署が変わることもありますが、大学の業務というのはそれほど変わりません。業務の性格で管理をしたほうが、法人文書にはふさわしいんで

すね。たとえば、土地交換の業務が、昔は営繕課だったがいま何課の担当かわからない、というときでも、土地交換という業務からたどることができるわけです。

森本 アーカイブズ学の一つの考え方です。

——文書館は本郷本館と柏分館の二館体制ですが、役割の違いは？

森本 重要文化財指定された戦前の文書、歴代総長関係の資料などが本郷に置かれ、それ以外の資料は柏に置かれています。これから移管される資料も基本的には柏に配架されます。

加藤 まずは、保存年限が2015年3月満了の文書と2016年3月満了の文書を集めていきます。それ以前のものでも、大学運営の記録として重要な資料は随時受け入れます。法人文書ファイル管理簿は2001年の情報公開法に対応したもので、各課の所蔵文書を書き切れていない可能性があります。収蔵庫にあるのは知っているが中身を把握していないというものもあるでしょう。それらが引越しの際に無評価で捨てられるのは大学の財産の損失です。文書館を思い出してください。

森本 従来は大事そうで捨てられない文書を各課で持っていないといけませんでしたが、今後は文書館が大事に管理します。整理も情報公開の対応ももういりません。あらゆる点で原課と相談しながらやります。ぜひ移管を進めてください。

宮本 普段気にも留めない資料から、お宝が出てきておもしろいこともありますよ。いっしょにそれを楽しみましょう！

赤門の守衛の日記



↓赤門の守衛さんの大正10年の業務日誌です。1月1日のページには、当日の天気、史料編纂所付近を夜警で巡回したこと、子供が構内を散歩しているのを制止したこと、医員が門を出てまた入ってきたことが記されています。当時の警備の様子がよくわかる貴重な資料です。



昭和11年入学理学部学生写真



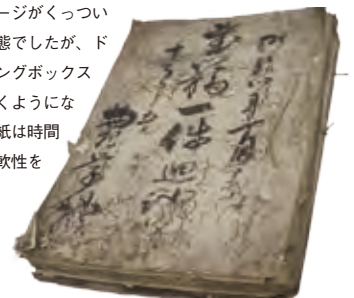
↓NHKの次の朝ドラ担当者から当時の襟章を確認したいとの問い合わせがあったのを機に調べた資料です。帝大生が出るドラマだと当時どんな服装だったかが重要なのです。写真を見ると襟章はS字(理学部 science のs)。次の朝ドラで帝大生が出たら襟章を確認！なお、アーキビストの一人は森永さんに一目惚れしてしまいました。



農学部前身の図書購入リスト



↓農学部の前身となる内務省農学掛の明治7年からの資料。「書籍一件廻議」と題された、どういう書籍を購入するかのリストです。虫食いが激しく、ページがくっついて開かない状態でしたが、ドライクリーニングボックスで処置して開くようになりました。和紙は時間がたっても柔軟性を保つのです。



梶田先生に贈られた賞・章・記念品で振り返る

ノーベル賞の余韻

ノーベル賞授賞式以降、梶田隆章先生には、日本でも様々な賞や章、記念の品々が贈られました。ノーベル賞にも決して引けを取らない誉れの数々、心のこもった贈り物をとおして、その栄誉の一端を改めて感じていただきましょう。

● 12月16日(水)

柏市民特別功労賞

柏キャンパスのすぐ南に位置する柏市立十余二小学校の5・6年生168名が集まり、「一生じまんできますよ」「これか」「らも」「研究が」「んぼって」「くさださ」「い!!」など、思い思いの手作りプラカードを掲げてくれました。

トロフィー



小学生たちの手作りプラカード



● 1月12日(火)

埼玉県民栄誉章

川口市の錫製品工房・錫光さんによる「UZURAI UZUSIO ぐい呑ペアセット」は、上昇機運を祈念した右肩上がりの

ツチメ柄。ぬいぐるみは、県民の鳥・シラコバトがモチーフの先輩マスコット「コバトン」と、バナナマンの2人が考案した2014年生まれの新マスコット「さいたまっち」の2体でした。

錫のぐい呑



県のマスコットぬいぐるみ



● 1月13日(水)

東松山市名誉市民称号

梶田先生の母校・東松山市立野本小学校の後輩からは、筆者の心の振動が伝わる素晴らしい作文とかわいい似顔絵つき寄せ書きアルバムが。式典で配られたバッジの双子はウォーキングが趣味の市のマスコット「まっくん・あゆみん」です。

似顔絵つきアルバム



作文 <http://bit.ly/1XPj7cD>

缶バッジ



● 1月17日(日)

富山県特別栄誉賞

名入れ箱枳



鑄ぐるみ銅花器「地から宙から」は、高岡市在住の人間国宝（重要無形文化財「鍍金」の保持者）大澤光民氏作品。

銅花器



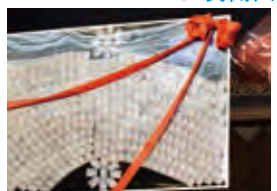
太陽が地球の生命を育むために発するエネルギーと地球の生命が宇宙に発するエネルギーを表しているそうです。

● 1月18日(月)

受賞記念学術講演会

安田講堂で開催された東京大学主催の学術講演会では、梶田先生の年齢に合わせた56本のバラの花束（と今後の発展を願う意をこめた57本目の一輪）、さらに、教職員や学生からのメッセージが書き込まれたスーパーカミオカンデの大展開図が贈られました。

寄せ書き付スーパーカミオカンデ展開図



● 2月4日(木)

越谷市名誉市民賞

越谷に伝わる「籠染め」という日本唯一の藍染め技術を活用し、灯笼として商品化されたのがこの品。「日光街道 越ヶ谷宿」の文字は徳川家18代当主が揮毫したものだそうです。

籠染灯笼



● 1月25日(月)

岐阜県民栄誉大賞

俳句

岐阜県民栄誉式典と飛騨市名誉市民の式典の前に梶田先生が訪れた道の駅スカイドーム神岡（スーパーカミオカンデ関連展示がある）では、飛騨神岡高等学校の皆さんがお祝いに詠んでくれた俳句がパネルにズラリ。「ニュートリノ俳句 すり抜けずに 心にぶちあたる」(字余り&お粗末)。

銅像



トロフィー



● 2月28日(日)

宇宙卵 2016

富山市名誉市民称号

富山ガラス工房館長・野田雄一氏のガラス作品は、アンモナイトを封じ込め、アインシュタインの公式を描き、無数の星々を散りばめることで悠久の時の流れを表現。卵が孵る時、宇宙の謎が解かれる!?



● 3月3日(木)

盾など

さいたま市民栄誉賞

梶田先生がさいたま市内の埼玉大学で学部時代を過ごしたという縁での受賞。表彰状とともに記念の盾などが贈られました。市のPRキャラクター「つなが竜ヌウ」も受賞を祝ってくれました。



※今回紹介したのは贈られた賞・章・記念品のごく一部です。

教養教育の現場から

第14回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

輝く講師陣が日本の多様性の現状をフラットにレクチャー

／学術フロンティア講義・全学自由研究ゼミナール「ダイバーシティデザイン講座：多様性社会を知る～

違いを認め合う社会づくり

お話／教養教育高度化機構初年次教育部門
総合文化研究科・特任准教授

坂口菊恵



講義の発端はオランダ視察だった

—多様性をテーマに、関連する諸分野から11組の講師を迎えてオムニバス講義を行ったそうですね。この授業が生まれた経緯や意図を教えてください。

「2011年冬学期に、全学自由研究ゼミナールの枠で、持続可能社会の手本とすべきオランダの教育施設やまちづくりなどを学生と見てきました。私はもともと人の性行動や社会行動の生物学的な基盤を研究していたので、新しい取り組みがしやすい社会基盤があることに興味があったんです。昔、オランダでは天然ガスが出てモノカルチャー経済が発展しましたが、後にそれが破綻してひどいことになった。この「オランダ病」を回復させたのがワークシェアリングという考え方で、日本社会にも大きな示唆になると思いました」

「その後、「教育と社会システムから」「ワークライフバランス・ワークシェアリングをめぐる施策と現状」「少子化対策をめぐる議論と取り組み」「セクシュアルマイノリティの社会参画」と一連の授業を行ってきた経緯から、今回は、LGBT、マタハラ、介護、障害などの諸テーマが横につながることを主眼に置きました。従

来は、聴覚障害者の団体でもろう者と難聴・途中失聴者でわかれていたり、障害をもつ人の団体とLGBTの団体が互いを知らなかったり、テーマ間の交流はなかった。それが、性的マイノリティの中でLGBTという言葉ができてまとまり始め、その他のテーマ間のつながりもできてきた。それを見て根の部分が共通することに気づき、これらのテーマがつながっていることを若い学生に伝えようと思いました」

キラキラした活動家が駒場に集結

—講師の選定の際に意識したのは？

「多様な顔ぶれにすることと、当事者以外の視点も入れること。あと、若くてキラキラしている人を、と思いました。そのほうが学生が身近に感じられるので。理論云々でなく、社会の方向性を学生に端的に示したいという思いがありました」

—学生の反応はいかがでしたか？

「受講者は毎回30～40人で、大盛況とはいきませんでした。LGBTの回だとLGBT関連の受講者、聴覚障害の回だとバリアフリー関連の受講者という感じで、横のつながりを実感するまでには至りませんでした。だからこそ問題として存続しているということでもあります」

「2回目には、講師の著書を中学生時代に読んで人生が変わったという学生が何人かいて、よかったです。3回目では、講義後に講師と受講生が食事に行ったそうで、東大以外での講演と比べてもポジティブな反応が多かった、と講師が喜んでいました。LGBTの家族の問題は近年社会に浸透しつつあり、学生は親近感をもったようです。それから、いつも後ろに座っていた学生が、幼少時からマイノリティと交流するのが大事だ、と繰り返し書いてきたのも印象的でした」

—1月9日には本講座から派生した公開シンポジウムもあったそうですね。

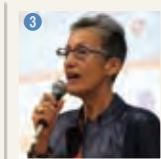
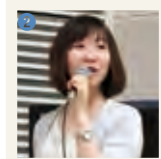
「性的マイノリティがいきいきと働ける職場づくりを目指すNPO法人「虹色ダイバーシティ」からのオファーでした。約100人の参加者のうち、1割は報道関係者でした。多様性を重視する東大の姿勢を学外に示した意義もあったかと思います」

—次年度の新シリーズについては？

「次回はやり方を変えて、グループワークを主にしようと思っています。ダイバーシティ推進の取り組みを考えると、LGBTの問題解決に向けたビジネスモデルをつくるか、講師と学生がともに多様性について考える授業にしたいですね」

全11回の講義タイトルと講師陣

1	「はじめてのLGBT」松中権氏
2	「「違い」を活動の原動力に」杉山文野氏
3	「さまざまな家族のかたち」小野春氏・青山真侑氏
4	「ませこぜの社会をめざす」東ちづる氏
5	「いまそこにある理不尽さに声をあげる」小酒部さやか氏
6	「バリアフリー社会をつくろう」斉藤りえ氏・おときた駿氏 ①
7	「音楽を通じて介護の世界に「楽しさ」を」柴田萌氏 ②
8	「なぜ私たちはLGBTイベントを支援するのか」ティーツィアナ・アランプレセ氏 ③
9	「聞こえる世界と聞こえない世界をユニバーサルデザインでつなぐ」松森果林氏
10	「同性婚とパートナー法をめぐる動向」寺田和弘氏
11	「多様性社会をめざすデザイン」井上滋樹氏



↑スピニングアウトシンポ「アメリカLGBTの現在」は東京大学LGBTQ教職員会の石丸徑一郎先生（教育学研究科）とのコラボ企画。活動家5人の報告のほか、本学学生による「性的マイノリティ当事者が職場に求める環境調査」報告もありました。

集中連載

ビジョンのビジョン

起草メンバー座談会で見えるその背景と展望

第3回／新しい社会連携に向けて

鈴木真二（司会／広報室長）○では中身の話に入ります。研究と教育についての姿勢をお聞かせください。

総長●研究の源は人です。若手研究者の雇用が不安定な状況を改善し、いきいきと研究できるよう導きたい。教育については、濱田先生が手掛けた学部教育改革をしっかりとフォローアップしたい。「知のプロフェッショナル」育成の次の段階は大学院改革です。企業が自前で人材を育てるのが難しいなら大学がやらなければ、という問題意識から出たのが国際卓越大学院構想です。

齋藤希史◆文系では、大学院に進んでも将来の展望が見えないという問題があります。東大を魅力的な場にするためには、教員自身が「知のプロフェッショナル」として魅力ある存在になることも大事です。

藤井輝夫■社会に送り出す人材という点では、社会連携をもう少し意識すべきだというのは共通認識でした。

総長●社会とオーバーラップして行動する大学。これが社会連携の基本です。産業界と大学の「協創プラットフォーム」をつくりたい。昨年のホームカミングデーで様々な世代と話した際に、この話は熱く支持されました。特に卒業後20年の人が集まる会では皆さんに囲まれて……。切望されていると確信しました。

佐藤健二★社会科学では、確固として存在する社会をどう認識するかを問題にした時代がある。でもいま社会は脆いものだとして理解されています。だからこそ大学がいかなる公共性を構想するかは社会連携の軸になる。

坂田一郎▼私が政策ビジョン研究センターを預かる際に思ったのは学術成果を社会に発信することで学問も鍛えられるということ。学問と社会は繋がっています。

藤井■産学官民の協働をアクションの部分で積極的に打ち出したのがよかったですね。時間軸と空間軸の両方から公共性について触れたのもよかった。積極的に社会と関わりながら公共性を支える部分を常に生み出していくことを、適切なバランスで表せたと思います。

佐藤★柳田國男の問題提起を思い出します。多数決は民主的だというのが、いま生きている成員が全員一致で決めたとして、それが正しいのか。過去の死者や未来の子孫もその選択に参加する権利をもつのではないかと。現代の環境問題にも繋がる論点だと思います。

齋藤◆そんな思考を可能とする時間の流れがあるべき。日常では時間がどんどん流れますが、大学では時間をとめたり、流れの下に深く潜ったりもできてほしい。

総長●大学はタイムスケールが非常に多様で、そこから発生する責任があることは伝えたいですね。経営が苦しいから産学連携で稼ぐ、ではなく（笑）。（つづく）

※1月8日の座談会の抄録です（ロング版は「淡青」32号に掲載）。

第29回

留学生さん
いらっしやい!

海を越えて東大に来た学生に聞きました。



カメルーン

ティアコ・ジャイモ・ウォルターさん

Tiako Juimo Walter

学際情報学府修士2年

日本生活9年目。サッカー好きだけど、部活は茶道部で長時間の正座が大変だったと語る明るい青年。日本のカレーが大好きで、今度ワニ肉カレーにも挑戦してみようか(?)。

Q. 日本に来たきっかけは?



工学に打ち込む父の背中を見て育ったので、自分もエンジニアを目指すことに。日本製家電ファンの父から日本留学を薦められました。奨学金を得て日本の高専、大学で学んだ後東大に入りました。自分のやりたい分野で素晴らしい研究をしている教員がいたからです。

Q. いま何を研究していますか?

電力消費量をオープンAPI[※]でより正確、実践的、低価格に測定する方法をスマートビルで実験しています。例えば冷蔵庫の温度をどこからでも見れるようにすることで、効果的な省エネを目指します。卒業後は日本の企業で働き様々な技術を習得し、その技能をアフリカの諸問題解決のために役立てたいです。



※ Application Programming Interface

Q. 東大・日本で困ったことは?



今年だけ就職活動の時期が変更になり、論文作成と就活が重なって大変でした。東大は良い制度やサービスがたくさんあるけど、留学生向けの情報が少ないように思いますね。

Q. 東大で好きなところは?

東大は様々な分野の勉強ができるのがいいですね。授業では第一線の有名人が登場したり、素晴らしい人たちと交流できて嬉しいです。卒業生のネットワークも魅力的です。



Q. カメルーンについて教えて!



カメルーンは一夫多妻制ですが、僕は一人で十分です（笑）。結婚式も3種類あって、部族の式ではベールを被った大勢の女性の中から妻を当てる儀式もあるんですよ。写真は弟と秋田のナマハゲと記念撮影した時のものです。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

ワタシのオシゴト 第121回

RELAY COLUMN

農学系総務課附属演習林
北海道演習林会計係 係長

岡田教和

北の国(の森の事務室)から



静かな事務室の雑音源？

ここは富良野。北海道のと真ん中。山手線の内側3.6個分(文京区の20倍)の広大な森林。これが私が勤務している北海道演習林です。

森林に関する様々な研究や教育、天然林での長期的な施設実験が行われており、雨ニモ負ケズ、風ニモマケズ、雪ニモ寒サニモ夏ノ暑サニモ負ケナイ教職員がオシゴトしています。

私のオシゴトはこの会計事務。主に予算、収入契約、競争契約、各種伝票作成等を担当しています。測量機器や林業道具、自動車・スノーモビル・大型重機等多様な契約があり、道具や林業作業等では「コレなに？」も多くあります。また、演習林事務ならではのオシゴト、林産物販売契約事務も担当(東大でも木を売っています。毎年九千万円程度)。

樹木のことは判りませんが、森がゆっくり動き続けているのを感じながらオシゴトしています。



今季の作品。冬も楽しんでます。

得意ワザ：周囲を和ます(悩ます?) 連続ダジャレ
自分の性格：不器用ですから……
次回執筆者のご指名：大村栄さん
次回執筆者との関係：地方演習林事務つながりです
次回執筆者の紹介：温厚でコシがある方です

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第124回

産学連携本部のEDGEプログラムでのシリコンバレー研修

文部科学省のイノベーション人材育成事業であるEDGEプログラムは、本年度で2年目になります。昨年から引き続き、本学でも様々な取り組みが行われてきました。

産学連携本部では、大学および企業の中のリアルな研究成果を基に、起業に関する専門家によるメンタリングを通じて事業化構想を練るチーム活動を行っております。昨年度は大学単独チーム、企業単独チームだけでしたが、今年度は、事業開発者の育成を目指すために、研究成果を提供する大学と事業開発者を送り込む企業との混成チームを新たに加えた3種類のチーム構成としました。チーム活動の最後となるSi Valley研修(2月15日～2月20日)には、Stanford大とSanta Clara大でのアントレプレナーに関わる講義(全5回)、現地のアントレプレナーを支援するインキュベータやベンチャーキャピタル等の機関の訪問、今まで練ってきた各チームの事業化構想を現地ベンチャーキャピタリストに英語で発表するという3部構成のプログラムに東大から10名、企業から7名が参加されました。事業化構想発表の審査を担当したベンチャーキャピタルの方々からは、研究成果を基に練るプログラムであっても、市場や顧客の課題から構想の構築に当たるべきとの指摘も受け、今後の事業化構想に大いに参考となりました。更に、引き続き事業化に向けて支援したいとベンチャーキャピタルから評価された有望な事業化構想があったことや、大学院の課程修了後にアメリカで起業したいという研修参加者からの意識の高い発言もあり、全体的に非常に有意義な研修となりました。

私共も研修参加者達の今後の活躍が楽しみです。



東大のEDGEプログラムでは「イノベーション教育」(0から1を生み出す教育)と「アントレプレナーシップ教育」(1を10に育てる教育)をシームレスに提供しています。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第104回 バイブル

情報学環・生産技術研究所 教授
教養学部附属教養教育高度化機構 大島 まり
科学技術インタープリター部門

科学技術も見た目で決まる

見た目が大事と言われるのは、人に限ったことではないかもしれない。下の二つの写真を比べてみてほしい。この2つの写真は、中学校・高校への貸出教材として開発した金属教材をホームページで紹介するために撮影したものである。



写真1 2011年の写真

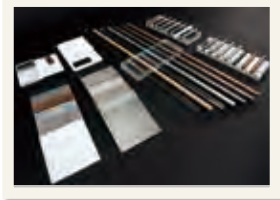


写真2 最新の写真

写真1は約5年前に撮影した写真で、教材の金属棒や金属片を並べ、研究室で撮影した。一方、写真2はホームページの改訂に向けて、最近撮影した写真である。背景、そして金属の配置とともにライティングも含めて、本学生産技術研究所の映像室の方の協力を得て撮影した。見ておわかりのように、素材が同じでも、少しの工夫で見た目が大きく変わるものである。ホームページを見て、使ってみたいと思うのは、写真1だろうか、それとも2だろうか。

今まで、必要なことが伝われば、十分であると思っていたので、写真や図面に対してはあまりこだわりがなかった。しかし、インターネット、そしてあらゆる所に様々な情報が飛び交っている昨今、関心を持ってもらい、少しでも見てもらうために工夫することも大事なのではなからうか。私たちも、重要な事柄があるときには、服装に気を遣っておしゃれをするのであるから、伝えたい物があつた時に、見た目で印象が変わるのであれば、よりよく見せるための工夫も大事である。

とは言うものの、一番大切なことは中身。あくまでも、その中身の良さを引き出すための見た目であることを忘れてはいけない。工夫するにも、倫理をきちんと守った上で、中身の魅力を引き出すように見た目にこだわらしましょう。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第58回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(2~3月)

2月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア、福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
2月29日	第26回救援・復興支援室会議
3月	東日本大震災被災地スタディーツアー、福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常⁽³²⁾

本部企画課係長(遠野分室勤務)



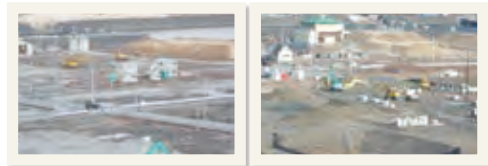
文: 佐藤 克憲

東日本大震災発生から今年11日で節目の5年を迎えました。岩手県では一時期より少なくなったとはいえ、現在も地元の新聞において毎日何かしらの震災復興関連記事が取り上げられています。また、東北地方のNHKでは毎週木曜日のお昼の時間帯に、被災地の現状について毎回場所を変えて地元の方から話を聞く「被災地からの声」という番組が、震災発生後間もない時期から現在まで継続して放送されています。しかし、東北地方以外では毎年3.11前後を除いてメディアで取り上げられることも少なくなっているように聞いています。

「取り上げられなくなったということは、復興はかなり進んでいるのだろう」、「5年も経てばもう支援は必要ないだろう」とお考えの方も少なからずいらっしゃると思います。実際のところどうなのか!? 今回は本学大気海洋研究所の附属施設がある大槌町について、一昨年の本コラムに掲載した町の中心部を高台から見た震災3年後の写真と、同じ場所から撮影した現在の写真を比較のために掲載します。右側の現在の写真については、実際には写っている範囲の周りに建物がちらほら出来始めてはいるものの、大半の場所が5年経った今でも写真のとおり、嵩上げの土を盛り多少整地がなされた程度という状態です…。

可能であれば現地に来て何らかの支援(観光も含め)を、難しければ震災を教訓に在住・在勤地域の防災に取り組む活動をするということでもよいと思います。この節目を機に、是非復興支援、防災活動等を行動に移すことも検討されてみてはいかがでしょうか。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)大槌町中心部震災3年後(嵩上げ開始した頃)。

(右)大槌町中心部現在(未だ建物はごく少ない)。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線:21750(本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
2月10日	農学生命科学研究科・農学部	五十嵐圭日子准教授らのグループの研究成果が、ギネス世界記録™に認定されました	1月27日
2月26日	低温センター	第7回低温センター研究交流会開催	2月23日
2月29日	政策ビジョン研究センター	日本経済の課題と構造改革のオプションー IMF の見方 開催報告	1月18日
3月4日	広報室	東大発ナノテクノロジーを知ってもらいたい：第7回 On-site@ 工学系研究科総合研究機構	2月29日
3月4日	本部学生支援課	H27 年度 体験活動プログラム活動報告会開催	2月29日
3月8日	本部学生支援課	【七大戦ニュース No.2】 航空部が七大戦3連覇！ 総合1位をキープして夏競技へ	2月18日
3月10日	広報室	広報誌「淡青」32号を発行しました	3月10日
3月11日	大学総合教育研究センター	大学院生向けに英語での教育力向上ワークショップを開催	2月15日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
2月22日	本部広報課	平成27年度退職教員の紹介	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00015.html

CLOSE UP



ギネスワールドレコーズ ディレクター ヴィハーグ・クルシュレーシュタ氏(右)からギネス世界記録公式認定証授与。左から五十嵐准教授、石田卓也特任助教、中村彰彦博士(現分子科学研究所助教)。

五十嵐圭日子准教授らのグループが世界一に (農学生命科学研究科)

農学生命科学研究科の五十嵐圭日子准教授らのグループが2015年10月14日(水)にProtein Data Bank (PDB: <http://www.rcsb.org/pdb/home/home.do>)に登録したセルロース分解酵素(セルラーゼ)のX線結晶構造が、「酵素のX線結晶構造解析における最高解像度」(Highest resolution X-ray crystallography image of an enzyme)としてギネス世界記録®に認定され、1月27日(水)にギネス世界記録公式認定証授与式が行われました。

セルラーゼは、木や草などのセルロース系バイオマスを様々な物質に変換するためのバイオ

リファイナーに欠かせない酵素であり、その詳細な構造解析はより反応効率の良い酵素の開発につながります。

ギネスワールドレコーズジャパンは『匠ニッポン』プロジェクトを通じて、日本の技術者、研究者、職人の技術力、職人技などを「世界一」の名の下に発信することを応援しています。ギネス世界記録の公式サイトに掲載された五十嵐准教授らのインタビュー記事はこちらをご覧ください。<http://www.guinnessworldrecords.jp/jptakumi2016/jptakumi2016>

CLOSE UP



防塵服姿で撮影に励む参加者たち。



海外メディアや大使館の科学アタッシェの皆さんが参加しました。

東大のナノテクノロジー研究の現場を海外メディアに紹介 (広報室)

広報室の企画による第7回「UTokyo Research, on site」が、2月29日(月)に浅野キャンパスの工学系研究科総合研究機構で開催されました。今回のテーマは「ナノテクノロジー」。

プレゼンテーションでは、まず機構長の寺井隆行教授が機構の概略を説明し、ナノテクノロジーを活用した新素材開発で低炭素社会実現に貢献する使命について語りました。続いてナノ計測センターの柴田直哉准教授が、物質のナノ構造の特性をより正確に把握するために、最新テクノロジーを駆使した走査型透過電子顕微鏡(STEM)を日本の企業と協力して開発していることを伝えました。最後に大矢忍准教授が、武田先端知ビルにあるスーパークリーンルーム

を「山手線で空気が一番きれいな場所」と宣言し、ここで行われている研究を紹介しました。

研究室見学ツアーでは、日本電子と共同開発した2014年の世界最高記録の分解能0.045ナノメートルを誇るSTEMなどの電子顕微鏡や、参加者一同が防塵服を着て空気シャワーを浴びてから入室した武田スーパークリーンルームが注目を集めました。見学後の質疑応答では、東大のナノテクノロジーでどんな素材が作れるか、危険物質を計測した場合の危機管理の状況、国外の会社が東大のSTEMやクリーンルームを使うことができるか、などの質問が上がりました。

東大のナノテクノロジー研究の現場を海外に英語で知ってもらうよい機会となりました。



CLOSE UP

平成27年度体験活動プログラム報告会を開催

(本部学生支援課)



参加学生による発表の様子。



司会を務めた遠藤章仁さん(左)と瀧川翼さん(右)。会の運営には2人をはじめ約20名の学生が参画しました。

2月29日(月)、本郷の鉄門記念講堂にて、平成27年度の体験活動プログラム活動報告会を開催しました。プログラムに参加した学生、学生を受け入れた学外関係者及び本学教職員等約160名が出席しました。

五神真総長の挨拶の後、教育学研究科の大久保圭介さんが、福井県池田町での地域文化体験プログラムに同行して考察した体験活動プログラムの効果・評価について報告。そして、「シンガポールでビジネスを学んでみよう」、「測量船による海洋観測実地体験」、「世界の情報発信の中心地、ニューヨークの脈動を体感してみよう」、「東大病院入院中の難病の子どもの家族を支援するドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンのインターンシップ」、「陶板複製名画美術館を体験する」という5つのプログラムに参加した学生が、活動から学んだことや将来に活かしたい経験等について報告

しました。学外からは、東大同窓会淡星会からビデオメッセージを頂き、海上保安庁の中林茂様、ニューヨーク銀杏会の廣川謙一様、公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンの弘中信治様が、学生を受け入れた感想などをお話くださいました。

最後に南風原朝和理事・副学長より、参加学生の成長、困難への対応を客観的に評価する取組の説明と、受入関係者への感謝の言葉が改めて述べられ、報告会後の懇談会は、学内外の関係者が意見交換をする交流の場となりました。

なお、今年度からプログラムの発展に顕著な功績のあった個人・団体に感謝の意を表し功績をたたえる「特別功労賞」を創設。東大同窓会さつき会アメリカの大迫政子様、青森県深浦町の山本千鶴子様、新潟農園の新岡重光様、大塚国際美術館様、東京都立北特別支援学校東大こだま分教室様が受賞されました。



CLOSE UP

「英語で教える」授業のワークショップを開催

(大学総合教育研究センター)



授業中のトラブルに英語でどう対応するか議論する参加者とファシリテーター。



PAGEのプロジェクトロゴ。

2月15日(月)、新プロジェクト「Professional and Global Educators' Community (PAGE)」が本格始動しました。高等教育のグローバル化を背景に「英語で教える」授業の拡大が見込まれ、学生はもちろん教える側も変化の渦中にあります。本学の教員、将来教壇に立つ大学院生やポスドクといった人材が変化に円滑に対応する後押しをすべく立ち上がったのがPAGEです。

ワークショップ会場の福武ラーニングスタジオに集まったのは、14名の若手研究者、大学院生のほか、学内外の教員の皆さん。参加者は4グループに分かれてケーススタディーに取り組みました。まず、留学生が大半を占める教室を舞台にしたケースドラマを全員で視聴し、そのストーリーが投げかける授業の諸問題にどう対処すべきかをブレインストーミング。続いて、

グループごとに扱う問題と対応方針を選び、具体的にどんな行動や英語表現で事態を好転させるかを議論。発表では、各グループが担当した問題と対応方針を明示し、どう行動・発言するか、英語のスクリプトを例示してアイデアを共有しました。発表のたびに講師の中原淳准教授(大学総合教育研究センター)や栗田佳代子准教授(同)の講評が入り、終盤には全体で内容を検討するなど活発な意見交換ができました。

参加者アンケートからは、「短時間でご用意されたことが信じられないクオリティ」、「実践とブラッシュアップの機会をたくさん作っていただけたら」など、満足感や期待感が垣間見られます。小規模なワークショップでしたが、PAGEにとっても学びの多い一日でした。PAGEは今後様々なプログラムを企画していきます。



CLOSE UP 広報誌「淡青」32号発行(広報室)

東京大学の広報誌「淡青」32号の特集は、「梶田隆章、『協創』と『振動』のノーベル賞。——素粒子物理の基盤と人の心を揺り動かしたニュートリノ研究」と、「この6年間を見通す五神真総長の指針『東京大学ビジョン2020』」の2本です。前半では、梶田隆章先生の2015年ノーベル物理学賞受賞という大きな栄誉について、エキサイティングなニュートリノ研究の歴史と、スベクタフルな授賞式の感動を

中心にお伝えします。後半では、東京大学が2020年までに目指す姿を「卓越性と多様性の連環」を柱としてまとめた五神真総長のアクションプランについて、起草メンバーの声とともに紹介しています。表紙写真は東大の2つのノーベル賞を見つめてきた浜松ホトニクス製の光電子増倍管。連載の「キャンパス散歩」では駒場南東端の数理科学研究科棟周辺エリアを詳しく取り上げています。ご一読ください!



平成28年度
学内広報
配布スケジュール
※別冊発行に伴い号数は変わることがあります。

1481号	4月28日	1483号	6月30日	1485号	8月31日	1487号	10月31日	1489号	12月26日	1491号	2月28日
1482号	5月31日	1484号	7月29日	1486号	9月30日	1488号	11月30日	1490号	1月31日	1492号	3月31日



駒場の風景

普段は弥生キャンパスの最奥に生息している私であるが、年に数回、駒場キャンパスを訪れることがある。駒場寮の跡地にはモダンなキャンパスプラザが建ち並び、もともと生協があった場所では21 KOMCEEのガラスがまぶしい光を放っている。20数年前、私が駒場時代にとっても長い時間を過ごした「旧物理倉庫」(軽音楽系サークルの練習場所)は、当時でさえ地図上では存在しないことになっていたが、今は物理的にもきれいに消滅してしまった。それでも駒場に来るたびに、あの頃の青い日々が昨日のように思い出される。

入学当時の私は、一定数の理科一類生がそうであるように、機械や情報、電子工学などに興味をもっており、工学部電気電子工学科などへの進学を漠然と思い描いていた。そんな私を生物学の世界に誘ってくれたのは、偶然履修した総合科目で聞いた生命科学の話であった。生き物のしくみの複雑さと巧妙さに私は強烈に魅了された。とはいえ、学業よりもむしろ音楽が人生の中心だったその頃の私が、化学生命工学科への進学を決心した最大の理由は、超絶技巧で鍵盤を弾く憧れの先輩が同学科にいたということであった。その後も様々な偶然が重なり (<https://ncrna.jp/blog/item/36>)、気づけば今やRNAの専門家

の様なふりをしているが、駒場の頃はまさか自分が生物学者になるとは夢にも思っていなかった。

研究所にいと若い学生とふれ合う機会はあまり多くないが、興味を示してくれた学生と話す時、なぜRNAが面白いと思ったのか、どういう研究がしたいのか、将来のことはどう考えているのか……いつものように順番に質問をしながら、やる気にあふれ目的意識をしっかりと持った答えを期待する自分がある。一方で、学生時代の自分を振り返る時、決してそれらの質問に立派な返答ができたわけではなかっただろうと、どうにも居心地が悪い。「何となく面白そうだ」から、少しずつ作法を覚え、気付いたら食べるのも忘れて実験に打ち込み、しかし時には大いに迷い、不安を覚え、それでもやはり生き物のしくみは面白いと会得するまでのプロセスを、どうすれば一番うまく後押しできるのだろうか。あるいは後押しできると思うことなどおこがましいのだろうか。そんなことを考えながら、駒場東大前の駅から電車に乗った。

泊幸秀 (分子細胞生物学研究所)